

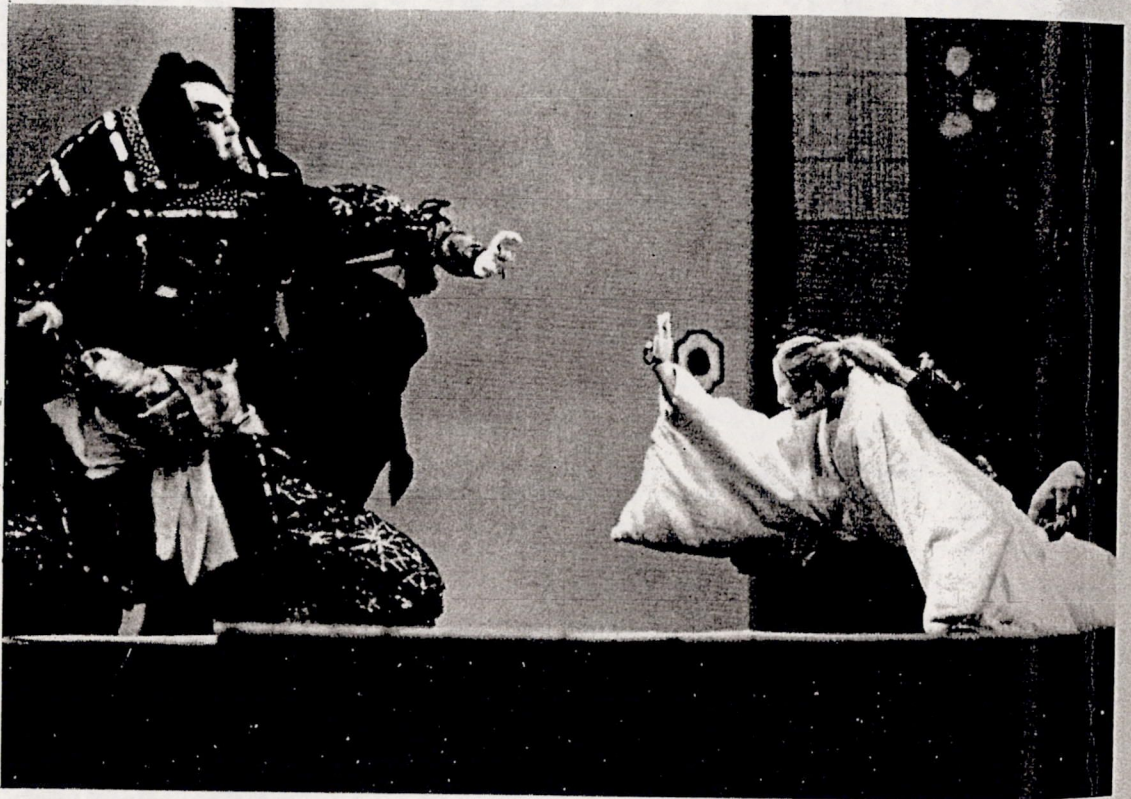
かながわの

民俗芸能

第7号

相模人形芝居
特集号

〔題字 神奈川県民俗芸能保存協会名誉会長 津田県知事〕



目次

鉄砲ざし系譜	永田 衡吉(2)
「相模人形芝居」の選択について	榎本由喜雄(4)
相模人形芝居大会アルバム	(5)
大会によせて	
相模人形芝居大会を見て	西角井正大(8)
ある人形つかいの死	加藤 雅毅(9)
相模人形芝居大会に出演して	岩崎 正美(11)

厚木東高校ひがし座の活動	沼田 貞芳(2)
相模人形芝居小史	02
選択された三人遣い人形芝居	
1. 奈佐原文楽(栃木県)	尾島 利雄(4)
2. 淡路人形浄瑠璃(兵庫県)	林 省吾(5)
ニュース・伝言板	06
編集後記	06

神奈川県民俗芸能保存協会

鉄砲ざし系譜

永田 衡吉

人形芝居の三人遣いは世界に冠絶する操法である。今は職能芸団の文楽だけのようになっているが、それが創始された十八世紀の中頃から明治期にかけて、全国津々浦々の散所・農山漁村に、セミプロまたは素人芸として盛行し、現在、その芸統を保持している人形座・カシラだけを温存する人形故地の数は、合算して百二十余座。北限は高倉（福島県）、南限は高千穂（宮崎県）。その間、二十九の府県に存在する。そのカシラ数は文楽および大正以後の公私の収集を除き、ざっと六千個。

この六千個の三人遣い人形カシラは二種の系譜に分れる。誰でもすぐ検別できる特徴はウナヅキの糸を引いた場合、カシラと心（胴）串の線が一直線になるもの。文楽系はこのカシラを用いる。おなじくウナヅキの糸を引くと、カシラが20〜30度、

仰向くもの（写真1参照）。その都合を仰度と称しておくが、仰度をもつカシラのことを俗に「鉄砲ざしカシラ」。その遣い方を「鉄砲ざし」。

人形遣のユーモアが生んだ術語で、このカシラを用いて人形を操る場合、遣手の左手が左前方に延びて、ちょうど鉄砲打ちが鉄砲を構えた格好にならざるを得ない型の約束があるので、この称呼が生れた。その時、人形は見物衆に向って、20〜30度傾くので、人形の姿かたちがナチュラールに見えるのである。この術語が、いつ、どこで生れたかは明らかでないが、鉄砲ざしの操法そのものは、一人遣い人形時代からの流系であって、十七世紀の裾突込みが、十八世紀初頭に背中突込みに改良された頃には、もうこの操法が生れていたのではないか。いや、操法そのものは、

くぐつ廻し・夷舁きの昔から、観衆に対して傾けて、授福し、話しかける態勢を取っていた。（拙著『日本の人形芝居』人形の操法）

われわれは机上で観念をたたく前に、鉄砲ざしカシラの現実と系譜を直視しなければならぬであろう。

このカシラの流布圏は淡路・阿波・真桑・川上（岐阜県）・親沢（長野県）・伊那の黒田・古田・今田・伊豆木。駿河静岡の名匠、人形屋長兵衛カシラのすべて。神奈川県相模人形三座、長谷・林・下中座。葛生吉沢（栃木県）・群馬県古カシラの上べて。高倉（福島県）。

以上の各地は十八世紀の古カシラを温存する、人形メッカとして知られているが、そのカシラは鉄砲ざしなのである。これらのうち、記年の内銘ある最古のカシラは黒田のフケ女形で、元文二年（一七三七）京都の製作。仰度25度。親沢の景清は30度。このカシラは景清の傑作である。元文二年は三人遣の操法が創始された享保十九年から僅かに三年後である。鉄砲ざしは三人遣の初期の機巧であることが明白である。

1 鉄砲ざしカシラ（25度仰向いて）。文楽系は顔の面と心串が平行になる）



さて、文楽系カシラと鉄砲ざしカシラには、もう一つ、微妙な相異がある。それは、前記、ウナヅキをつかさどる糸の機巧である。文楽系カシラの糸はト字型の鯨歯の「引栓」に結ばれ、胴串の前方に彫られた溝を通して引かれる。（写真2）鉄砲ざしカシラにはこの構造はなく、糸はチヨイ（小猿ともいう）と称する爪状の凸起に結びつけられる。（写真3）そのチヨイを、遣手が左指で抑えると、人形の首がうなづく。

この機巧の相異は、大阪の三人遣人形芝居が、竹本座と豊竹座に分れ、しのぎを削って芸術的大成を目ざした結果できたのである。これになう欠陥があった。人形を傾けて遣わない限り、その人形は仰向いて、カブキ芝居の按摩のごとく、アゴが天を指し、愚鈍に見えるのである。それはカシラが横を向く場合にもおきる。申せば、力学的な致命傷である。で、人形遣はこれを「阿呆に見える」と言って嫌った。で、その美的欠陥を克服するため、竹本座系の人形遣によって、現在の文楽に見るような、引栓型の直線人形が工夫された。また、吊り肩・糸爪肩・ノド木の横臥型など、種々の機巧が発明されて、人形遣の写実演技は完成するに至ったのである。その典型が文楽人形遣にあることは申すまでもない。



3 鉄砲ざしカシラのチヨイ（小猿）



2 文楽系カシラの引栓

就いて、貴重な文献がある。寛政年間（一七八九〜一八〇〇）に成稿したといわれる「浄瑠璃譜」の左の記述である。

「人形どうぐし（胴串）、西は引せん、東は小猿とて違ひ、片板（肩）、突上げ、丸どぶ（丸胴）、片腹みなみな東西の流あり、つかみ手とて指五本働くものあり、是も東はうで（腕）働く、西はうで首働かず、其外、人形遣の黒かぶ（黒衣）、西は前の襟、やはり打合せ、東は半合羽の如く左右のか

たにてかける。

西とは竹本座、東とは豊竹座のことである。三人遣の操法が発明されたから、五十年間にわたり、両座で、このような機巧が発明され、名称の相異もできたのである。両座の黒衣頭巾の伝統は、現代の文楽人形遣にも守られて、豊竹系・竹本系が一見してわかる。

特に「西は引せん、東は小猿」という説明はカシラの系譜に対し、頗る重要な決定をくだすであろう。すなわち、文楽系の直線型カシラは引栓式の機巧に限られ、鉄砲ざしは小猿（チヨイ）式に限られている。逆に申せば、引栓式の鉄砲ざしカシラは無いのである。ここに於て、鉄砲ざしカシラの系譜を豊竹座系と推断するのである。淡路道薫坊廻しはこの豊竹座の芸統を受け継いで、本島はもちろん、諸国を巡業し、各地に鉄砲ざしカシラを残して行った。

同時に、その式楽として式三番と白黒尉面を伝えた。前記、流布圏に挙げた諸国の人形座には、淡路伝承の他に白黒尉面を神聖視して、今なお式楽としていところもある。伊豆各地・群馬下長磯・志摩安乗・相模

牧野・豊前伊加利がそれである。豊竹座の鉄砲ざしは、江戸に流入した。江戸三人遣の流布は豊竹新太夫の功といわれているが、遣手の系譜については不明というの他はなく、十九世紀になって、西川伊三郎・吉川清五郎が鉄砲ざし操法を堅持し、明治に及んだ。吉川は淡路出身といわれ、水戸の縫左衛門一家はこれを支持して、関東に鉄砲ざしの芸系を拡げた。これが、現在、東日本に残る鉄砲ざしカシラである。また、このカシラを用いる狂言は時代物が主で、世話物は従であった。淡路の特殊狂言がそれを鮮かに証明するであろう。しかし、その淡路狂言が信州伊那の山村を始め、相模・上州などにも伝わっていることは、現存の浄瑠璃正本と上演記録の明証するところである。

約言すると、鉄砲ざしカシラの系譜は三人遣の創始期に発端し、主として豊竹座の人形遣によって使用され、これを受けて淡路道薫坊廻しが各地に運載し、江戸に及んだ。薩摩（縫左衛門）・西川・吉川の芸派がそれである。しかし、鉄砲ざしには舞台美を損

しかし、そのために鉄砲ざしカシラを過少評価してはならないであろう。そこには、説経・金平など、一連の古浄瑠璃時代のおもかげが揺々としてたゞよい、われらを三人遣い以前の夢幻泡影の人形世界に導いてくれる。鉄砲ざしカシラの存在価値はたゞに、人形操法の歴史を知る資料にとどまらないのである。（協会副会長・芸能史家）

「相模人形芝居」の選択について

榎本 由喜雄

わが国には、民俗芸能——民俗に深く根ざした芸能——が多種多様な形で、各地に伝承されている。これらの民俗芸能の中には、ほとんど、芸能の出発点からあった姿を、そのように残しているもの。中世から近世へかけての濃厚な民間信仰を芸能として、強く表現しているもの。農・山・漁村における、古風な労働や饗宴の印象を深くとどめているもの。さらには、民俗芸能の境界を脱して、芸術の領域に入ろうとするもの等、芸能史の上から考えて重要な芸能が多数存在する。また、民俗芸能の中には、その舞踊の様式や歌詞の旋律が舞踊上から、また音楽上からもすぐれたものが多く伝承されている。

このため、国はこれらの高度の価値を有する民俗芸能を一般に公開して、民俗芸能の持つ価値を普及・啓発するとともに、これを伝承する人々

々がその価値を認識し、保存の意欲を高揚することを目的として、都道府県教育委員会の尽力を得て、全国民俗芸能大会、ブロック別民俗芸能大会を企画し、助成して、観客・出演者の双方に感銘を与えて来た。

しかし、近時、社会的、経済的情勢の急激な変容などのために、民俗芸能の保存・伝承はきわめて困難な状態に立ちいたった。このため、国は民俗芸能の保護方策を一段と強化する目的のもとに、これらの民俗芸能のうち、特に重要なものを、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財として選択し（「文化財保護法」第五十六条の九による）、その実施している本来の時期に、実施している本来の場所で、実施している本来の方法により、民俗芸能を現地で公開するよう勧奨して、その公開に要する経費の一部を国庫において補助することとし、全国各地に伝承されている民俗芸能のうち、原則として都道府県において無形文化財として指定されているものから、次の選択方針により、民俗芸能を選出している。

△選択方針▽
 全国の民俗芸能のうち、その分類種目の代表的なもので、次のいずれかに該当するもの
 1 演技、演奏法および演出法等に特色の著しいもの
 2 地方的、流派的に特色の著しいもの
 3 演技、演奏法および演出法等に特色のあるもの、または地方的流派的に特色のあるもので、かつ、衰滅のおそれの特に強いもの

この結果、昭和四十五年六月、鶯宮馬楽神楽（埼玉県）、佐陀神能（島根県）等三十四件、同四十六年三月、伊予神楽（愛媛県）、保呂羽山の霜月神楽（秋田県）等三十件、同十月、比婆の荒神神楽（広島県）、板橋の田遊び（東京都）等二十六件の民俗芸能が選択された。なお、第一回の選択の際は神楽系、田楽系の芸能を主とし、第二回目の選択は神楽系、舞台芸能系（現在、舞台芸能として上演されている舞楽、能楽、歌舞伎、人形芝居等の原型または地方化したものとして伝承されている民俗芸能）を主とし、第三回の選択は田楽系、風流系の芸能を主として選択している。

神奈川県下の民俗芸能では、第一回に「チャッキラコ」（三浦市三崎・ちやっくらこ保存会）、第二回に「相模人形芝居」（厚木市林・相模人形芝居連合会）、第三回目に「吉浜の鹿島踊」（湯河原町吉浜・吉浜鹿島踊保存会）が選択されている。

このうち、相模人形芝居は、近世、上方・江戸で流行した三人遣の義太夫節による人形浄瑠璃が、相模地方で民間化し、今日に伝承されてきたものであって、現在、林座・長谷座・下中座があり、それぞれ「先代萩」「太功記」「酒屋」など十数曲をその演目に持っている。人形の首は、文楽よりやや小ぶりで、鉄砲さしという操法のため首の構成にも特色があり、人形芝居の変遷の過程を知るうえに貴重なものである、という観点から選択された。

（文化庁無形文化財調査官）



国無形文化財選択記念
相模人形芝居大会

アルバム

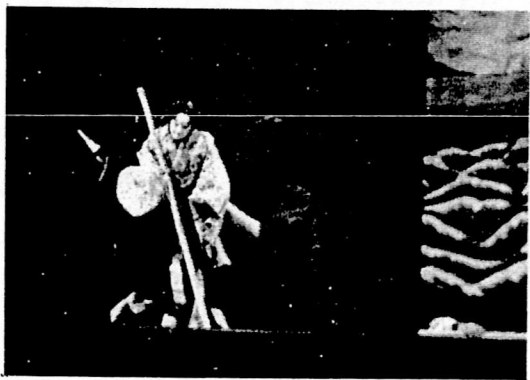
○とき 昭和47年2月26日（土）
○ところ 藤沢市民会館小ホール



1 生写朝顔話 宿屋の段
(前鳥座)



序三番叟 (長谷座)



熱のこもる拍手をおくった観客



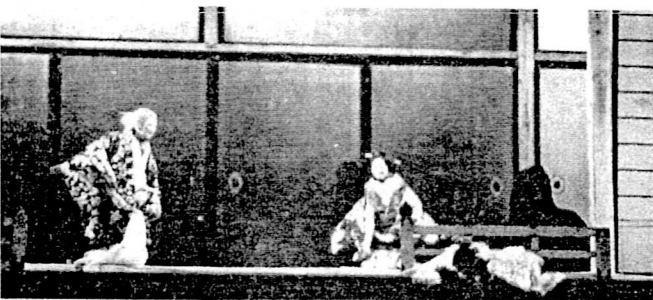
← 6 絵本大功記 尼ヶ崎の段 (林座)
(長紙写真参照)



7 艶容女舞衣 酒屋の段 (長谷座)



↑ 8 伽羅先代萩 御殿の段 (下中座)



2 菅原伝授手習鑑 寺小屋の段 (長谷座)



3 本朝廿四孝 十種香の段 (下中座)



↑ 4 奥州安達原
↓ 5 壺坂靈験記

↑ 袖萩祭文の段 (林座)
↓ 沢市内の段 (足柄人形芝居)



相模人形芝居大会を見て

西角井 正 大

二月二十六日(昭和四十七年)に藤沢の市民会館で、相模人形芝居の全部が集つての合同公演があると、国立文化財研究所の三隅治雄先生からうかがつて、やはりこうしたものに関心をお持ちの電通ラジオ・テレビ局の村上昌氏をお誘ひして雨の中を会場に遣入った。デンと据えられたシネ・カメラに記録撮影があるなと思ひはしたが、迂闊にも、パンフレットをよく見るまでは、国無形文化財選択記念の会であることに気付かなかつた。国がこの制度を講じて二年度目であるが、下中座・長谷座・林座のいわゆる相模人形芝居が、その伝統を公に認められたことは誠に悦ばしく心よりお祝ひ申し上げたい。

さて、後になって講評をとお依頼を受けたが、一観客として楽しみに行ったのだし、何よりも永田衛吉先生と云う大先生がいらつしやるのだからと逡巡してしまつた次第なのである。だが、軽々しくも承知してしまつたのだから、単なる見物人の戯言ながら、一筆書かしていただくことをお許し願ひたい。

日本の人形芝居と云えば、人形浄瑠璃文楽と云うのが通り相場である。異論はないが、世界の人形芝居から見ると、人形遣いが堂々と身体を見せて人形を操るといふのは異例である。人形の限界でこの方法でしか写真性を得ることが出来なかつたのである。遣手が隠れるという常識を敢えて逸脱したところに飛躍的発展が生れたのである。素顔を見せての出遣いも行なわれる。最早、人形

遣いは役者(淡路ではこう呼ぶ)に变身したのである。この点で文楽は、人形芝居であつて人形芝居でなくなつたのである。

相模人形芝居も文楽のように徹しい工夫と訓練を積み、文楽に比肩し得る舞台を見せることが出来るだろうか。それとも、農村芸能のまま固まつてもうこれ以上の発展を期待出来ない体質のものなのだろうか。

地方芸能が衰退の一途を辿っている今日、芸が頭打ちなのは止むを得ない。それが問題と云うわけではないが、古くは江戸系として東都をも賑わした筈である。私は、一度文楽の人形遣いにこの相模人形を遣つてみてもらいたいと思う。さすれば、相模人形の体質も可成りはつきりするかも知れない。文楽の人形と相模人形の違いについては、永田先生の大著「日本の人形芝居」(錦正社)に詳しく書かれていたので出来るだけ御覧いただきたいが、その最も大きな違いは操法と首の形状的な相違と云う。相模人形は人形を前傾させて遣う、鉄砲ざしと云う遣い方である。江戸時代に全国を興行して歩いた淡路の人形の影響を受けて生れた

地方の人形は、皆この鉄砲ざしといふことである。明治になって阿淡の人形は、首も子供の頭位もある大きさになり、胴も等身に近いほどに変化してしまつたので、今日では昔日の鉄砲ざしの技術がいかほどのものであつたか想像するわけにもいくまいが、近年の阿路人形はまだ相当に遣つていたし、現在も阿路人形の遣い手が文楽でも活躍しているの、その本来の技術の程度を疑ふ必要はなさそうに思う。さて、そう云う意味で、現在の相模人形の遣い手から文楽に助け人として出られる人はなさそうであつた。だから、人形の形態上の問題より、やはり技術上の問題の方が深刻なように感じられたのである。無論永田先生が云われているように様ざまな特殊性、目的の違いはある。また、現在の姿でも申せば一方は全くの職業集団、他方は全くの片手間の同好者の残在的な会といった決定的な相違はある。しかし、人形を遣う心の問題もあると思われた。腕時計をはめたままの人もいたし、不思議なことは元來履いていた舞台下駄を殆んど使用していなかったことだ。わずかに「壺坂」を

演じた足柄人形だけが舞台下駄を履いていた程度と記憶している。主遣いと左手・脚遣いの身長上のバランスや手すりの高さによることだつたかも知れないが、皆がそんなにバランスの崩れた組合わせでもなかつたろう。つまり、どんな民俗芸能であれ、演ずる時には出来るだけ姿勢を正す気持が欲しい。そしてそれが感動を呼び起すのである。敢えて苦言めいたことを云わしていただいたが、最後にプログラムにしたがひ、モから一筆しておきたい。

朝にはまだ間があつた。昭和七年くれ。小田原市小竹の道路端に而した九尺二間ひとまきりの住いで、漂泊の人形つかいが死んだ。相模に人形を伝えた江戸系最後の師匠、西川伊左衛門。七四歳。盲目の義太夫語りで内縁の女房だつたよし、亡骸のかたわらにぼつんと座り見えぬ目を宙に据え、それが癖の「チヨウチン、チヨウチン」といいながら子供がいやいやでもするように首を左右に動かしていた。チヨウチン、提燈。よしがなぜこれを口癖にしたのかだれも知らない。「お前を秘蔵弟子のつもりで育て

てきた」と死ぬ数日前いわれた小沢孝蔵氏(七〇歳・現下中座座長・農業)が五尺そこそこの師匠の亡骸をたて棺に納めた。その場に居あわせたもの、小沢氏のほか伊左衛門の実弟吉田冠十郎、よしの実弟吉田国五郎ら数人。

この「相模人形中興の祖」の小竹時代はどのようなものであつたのか。下中座員の話をつなぎると次のようだ。

ある人形つかいの死

加藤 雅 毅

「お前は水戸藩の武家の出だ」といつていた師匠だったが水戸からはひとりもこなかつた。

「おれは水戸藩の武家の出だ」といつていた師匠だったが水戸からはひとりもこなかつた。

村の世話役が棺をかつぎ、葬列は東隣寺を目指す。流れの芸能者がこの地に土着して、やがて二十年になろうとしていた。年の瀬が迫つて来た。村人は他国者の死に無関心だつた。

感情の起伏のいかにも激しい伊左衛門にくらべ、喜怒哀哀を旅路の果てに捨ててきた、という感じのよし。表情がまるでない。

ともかく、こうして寺小屋授業が始まつた。人形を教える伊左衛門は観音堂を、義太夫のよしは西の間を教室に使つた。人形の月謝は米三

ともかく、こうして寺小屋授業が始まつた。人形を教える伊左衛門は観音堂を、義太夫のよしは西の間を教室に使つた。人形の月謝は米三

升。それに当番を決めて、毎晩徳利一本を持参した。五合も飲むと見境いなくからむので、だれいうともなく徳利一本になった。その酒を飲みながら文楽ではあまりやらない。かみ手のうしろみや、吉田の泣きなどのダイナミックな江戸の操法を披露した。小柄だったせいも立回りの激しい時代ものより、技でみせる世話ものが得意だった。

さて、よしへの月謝は米一升に金三門。ひと月移古で一段あげ。月の半分はよしに語り、その間に文句を暗誦。残りの半月を弟子が語る。彼女は百番以上も義太夫を語ることができた。人形に合わせ易い語りだった。連日七・八人も移古をつける。さすがのよしも血を吐いた。そのよしに男の子を生んだのは、小竹へきた翌年のこと。とりあげばあさん宅に走るもの、お湯を湧かすもの、道祖神を倒すと安産だというのが、道道を駆け出すもの。よしの出産は村の事件だった。が、赤ん坊は山向うへ里子に出した。

農繁期。寺小屋教室に出入りするものがない。すると三味を背負ったよしの手を曳いて伊左衛門は「提燈」のつづきはもはやきこえなかつた。

漂泊の芸能者は異国で死んだ。下中座、前鳥座、長谷座、林座の古者たちはいまでも伊左衛門と人形を造った日のことをおぼえている。足柄人形座を加えて現在県下に五座。この数字は県単位では日本一だ。そしてその四座までを手がけた西川伊左衛門は、いま相模人形中興の恩人と評価されている。

つまり相模の人形は漂泊者の血と汗を吸いこんで完成したのだった。(NET朝日制作・制作部次長)

(編集者記・加藤氏はテレビ番組「日本の人形たち」制作のため、相模人形芝居を撮影された。)

村を出た。どこへ行くのか誰れが聞いても答えなかった。ひと月ほどで帰ったが、「芸人は汚なくとって、きれいに使うものよ」といいながら近所に菓子を配ったりした。

平塚の前鳥座、厚木の長谷、林座、特定のひいき筋——、よその村へ出稽古に行く事も多かった。そうした場合、いく先きを知らせることを常としたし、よしを連れていくことは決してなかった。だからよしを連れてのひと月もの無断外出は、門付して歩いているに違いない。村人はそう考えた。

流れの日々、彼らはどこを歩いたものだろう。よしに語りするとき、伊左衛門はなにを話していたのだろうか。奇妙な夫婦だった。およそ二人が語り合っているのを見たことがない。家での伊左衛門は終日人形のカシラや衣裳をつくっていたし、よしは、といえば横を向いて「提燈、提燈」とつぶやいている。

物が見える目でみた最後のものが提燈でもあったのか。門付け、提燈、ふたりの仲、芸磨。いずれも弟子たちの想像の域を出てはいないのだが……。確かなことはふたりとも

土着した「流れのもの」だった。この神秘的であり、どきどきするような技をもっていたこと。食事は伊左衛門がつくった。どんぶり飯におかずをのせてさしだすと、よしはうまいのか、まずいのか、ひと語もいわずに食べる。そんな風景を子供たちが遠くからこわごわ見ている。

伊左衛門はよく村人と衝突した。ちよつとした意見の違いがけんかに飛躍した。酔ってからだあげくの果て、取っ組み合いにまで発展することもあった。

「こんな村でなくともおれは食べる。さあばあさん行くぞ！」伊左衛門はどなり、よしはふるえながら三味を背負い、ふたりは出ていく。もし伊左衛門が若ければ、そのま流れの生活にもどれたかもしれない。しかし彼はすでに老いていたし、流れの生活のむなしさや苦しさを知りつくしていたに違いない。彼らはまた小竹へもどった。

東隣寺での生活はおよそ二年で終わった。息子の年季が明け、父親の住む小竹へくることになったからだ。小沢孝蔵氏の父が土地を提供し、

相模人形芝居大会に出演して

岩崎正美

今からおよそ二百年位の昔から、相模国には十五ヶ所ほどの人形を使う部落がありました。時代の移り変わりと共に次第に消滅して、昭和の時代には僅か三座を残すのみとなりました。これらは何れも江戸系の鉄砲ざしという使い方で、大阪文楽とは異った特色をもっておりました。

昭和二十五年に文化財保護法が制定されてから、各地で民俗芸能保存の声も高まり、神奈川県におかれても、真・先に長谷・林・下中座を県無形文化財に指定され、その後、神奈川県民俗芸能保存協会も発足し、各種の民俗芸能の保存には一層の拍車がかげられました。

民俗芸能の一番の悩みは後継者問題で、相模人形芝居とて例外ではありません。各座長さん達もそれぞれ立場から手を打っておられるようですが、呼べども答えず、笛吹けど

踊らずの状態、今の若い人達には何かあわないところがあるのでしょ。次第に座員が高齢化していく中で、後継者育成は緊急を要する悩みとなっており。そこで、昭和45年暮に各座長が話し合った結果、「相模人形芝居連合会」を結成することにいたしました。三座が独立して活動していたのをお互いに連絡を保ち、共通の問題は協力し合って対処していこうということであります。顧問に県文化財専門委員の永田衡吉先生、参与に県文化財保護課長を迎えて、まずは態勢づくりに専心いたしました。

各座の一層の盛り上げを促すため、四十六年四月に国無形文化財の選択を受けたことあります。やはり、一つの区切りがあることは必要で各座員の喜びもひとしおであったようです。そして、去る二月二十六日にはこの記念公演を藤沢市民会館で催しました。然るに当日は生憎と朝から降ることの少ない雪が降り出し、後には雨と変りましたが、主催者側も観客が少ないだろうと非常に心配されました。ところが、案に反して十二時三十分の開演の時は殆んど満員の盛況で、主催者も私も出演者も大喜びでありました。当日は国選の三座の他に、復活した前鳥座と足柄人形芝居も賛助出演し、五座の競演とあって一同が大汗を流しての熱演でありました。観客もまた熱心に見入って下さりまして、見せ場になるとあちこちで拍手が起り、出演者に大きな励みを与えてくれました。観客と出演者が強く結びれた舞台として、私は非常に感銘でありました。この大会を機にこれから貴重な古典芸能をぜひとも後世に伝えなければと痛感し、心を新たにいたしました次第です。

また特筆出来ることは、林座の「太十」の時多くの女学生が出演したことあります。これは、県立厚木東高校教頭であります沼田貞芳先生が私の家のすぐ前にお住いにな



東隣寺にある伊左衛門とよしの墓

厚木東高校ひがし座の活動

沼田 貞芳

相模人形芝居小史

ておられることから、ある時偶然にも高校生に呼びかけてみようか、との話で意見が一致し、早速に先生が生徒にアンケートのような具合に呼びかけて下さいました。意外にも三十名ほどの希望者があり、昨年六月から稽古を始めましたところ、実に呑み込みが早く十月十六、七日の同校の文化祭には立派に上演出来ました。これが大好評を博し、十二月二日にはNHKのテレビ番組で放映されるまでに至りました。なお、引続き「寺小屋」を懸命に稽古しており、相模人形芝居の保存に大きな力と刺激と示唆を与えてくれております。

将来、連合会に前鳥座と足柄人形芝居にも入会していただき、県下五座の相模人形芝居がますます発展し、末長く伝承されるよう、私どもの心意気だけでなく皆様方の支援をお願いいたします。

(相模人形芝居連合会会長)



上演中の厚木東高校生

したいと思っておりましたところ、当時とは校内事情も変わり、特に中村校長先生から強い賛同をいただいたこと、更に幸運なことに職務代行の岸先生が、この道に造詣が深く、積極的に生徒に働きかけて下さったこと。また林座々長の岩崎さんはじめ、特に川瀬さんご夫妻の献身的なお骨折り、引いては学校全体の理解と、地域社会の支援等々すべてがそろって始めてこの結果が生まれたものと思えます。五月上旬生徒へのPRも一通りできた所で林座見学の会を開きました。学校から数分の所にある林公民館へ出かけ、岩崎さん、川瀬さんなどから説明をきき、人形を造ってみせてもらいました。

「……………操の鏡曇りなき、涙に誠表わせり。」柄が鳴り幕が下りると、盛大な拍手はしばらく鳴り止まなかつた。昨年十月十六日、人形浄瑠璃同好会ひがし座第一回公演の時のことである。ここまでこぎつける苦勞が大きかっただけに、やっぱりやってよかった、これからも自信を持ってやっ行ってこうという気持が、この瞬間、みんなの一致した気持であった。生徒は「私達の演技をみんな真剣にみてくれました。」涙を流して見ている人が大勢いました。「こんなに拍手を受けるなんて、想像もしていませんでした。」……………

この時集まった生徒は三十数名でした。順々に手に取って触れてみたり、動かしてみたり、これが生徒と人形との文字通りはじめてのであいであったのです。以来一年人形と共に泣き、共に笑い、人形の不思議な魅力にとりつかれて、「気分のすぐれない時でも人形の顔を見、胸中をにぎったとたんに元気になってしまふ。」「私達の手で人形に魂を入れ、生き返らすんです。」という域に達してきました。もうこれは本物です。そのクラブ活動としての教育的価値などと改めて論ずる要はない高度な活動であると自負しています。さてこの一年間の反省に立って実際上の問題点を考え、その対策をのべてこの稿を終りたいと思えます。(一)、三年周期という短い間に、基本的な訓練から、高度の技術まで身につけ、これを伝えてゆくという繰り返される。(二)、一年間一切の道具を林座から借りてやってきたが、いつまでもこれに頼っていることはできない。国、県、市の文化財を生徒の練習に気安く使うことは、損耗を考えると許されないことである。(三)、卒業生に単なる高校時代の経験として

……………。「思わず泣かされました。」郷土の芸能もこれで安泰です。なごのことはをいただきました。これに力を得て、老人ホームの慰問にも出かけました。また市の文化祭にも招待されました。県主催の大会にも応援出演しました。更にNHKテレビに出演したことは大きな刺激となり、次のだし物に意欲的に取り組むきっかけとなりました。

さて本校でクラブ活動として人形浄瑠璃をとり上げた経緯にもどりますが、本校が市内寿町の旧校舎から現在地―市内林地区―に移転しました当時(昭和四十一年)既に衰退の一途をたどっていた林座を何とか東高校と結びつけたいと、岩崎座長さんと私とで、いろいろとやってみたのですが、やはり機熟さずというか、結局実現できずにおりました。昨年私が再び東高校に赴任して参りましたのをき、かけに今度こそ実現

終らせないで、ひがし座、林座との結びつきを考える必要がある。(四)、対外的な公演スケジュール、年間計画を次第にためてゆく。(五)、林座の公演の応援出演についてのルールを考える。等であり、(一)については出し物を精選して、いくつかの出し物について徹底的に身につけさせ、指導者なしでも確実に下級生に伝えてゆく。無制限にレパートリーを広げない。(二)については、そまつなものでもよいから気楽に遣える人形、道具を逐次作ってゆき借り物でないひがし座の財産にしたい。(三)については合宿その他機会あることに先輩を招いて後輩の指導と、自分達の勉強をさせ、行く行くは林座の座員になれたらなど夢を描いている。(四)、(五)については次第に一つのルールができることと思うが、無制限な出演はしない、授業は絶対に犠牲にしない等の原則はいうまでもない。この機会に当ひがし座の活動について遠慮ないご意見や、ご注意を頂くと共に、第二年度の活動をお見守り下さることをお願いして稿を終ります。(ひがし座顧問・厚木東高校教頭)

〔名称〕現在の神奈川県は旧国名でいえば相模国と武蔵国の一部から成り立っている。ところが、江戸時代から明治にかけて少くとも十五カ所にあった三人遣の人形芝居は、すべて相模国に属する。武蔵国には一カ所もなかったし、今もない。そこで、民俗芸能として現存する諸国の人形芝居が、その国名・地名をもって呼ばれるのにならない、これら十五カ所の人形芝居を相模人形芝居と総称するようにした。

〔分布〕相模人形芝居の分布を便宜的に分類すると次のようになる。

- 1 現在活動中のもの
 - (1)小田原市小竹Ⅱ下中座 (2)厚木市長谷Ⅱ長谷座 (3)厚木市林Ⅱ林座(以上国選択無形文化財・県指定無形文化財)
 - (4)平塚市四之宮Ⅱ前鳥座(平塚市指定無形文化財)
 - (5)南足柄町Ⅱ足柄人形芝居(古くは斑目の人形)
- 2 現在カシラのみあるもの
 - (一)内はカシラの所在地を示す

- (6)小田原市田島Ⅱ田島人形(小田原市郷土文化館)
- (7)藤野町大久和Ⅱ牧野人形(県立博物館)
- (8)座間市入谷(同地鈴木芳夫氏)

3 人形芝居のあった確証のあるもの(多くはカシラが他地区に混入されている)

- (9)平塚市大神 (10)厚木市妻田 (11)厚木市上古沢 (12)厚木市三田 (13)厚木市戸室 (14)海老名市社家 (15)山北町岸Ⅱ岸の人形

〔伝統〕相模人形芝居は大阪の文楽(国の重要無形文化財)と同じく一つの人形を三人の遣手が操作する様式で、通称、三人遣といわれる。三人は主遣(カシラ)と右手を操作する(左遣(左手)・足遣(足))と呼ばれる。この様式は享保十九年(一七三四)大阪竹本座で始められた。のち、全国に普及し、興業的にもカブキを圧する一時期を持った。今日、名作とうたわれる狂言のほとんどは、この三人遣が始められた以後に作られたものである。

さて、相模人形芝居の発祥は、その資料と伝承から見ると、各座により多少の異動がある。牧野人形の起源はカシラの伝統と遺品によっ

選択された三人遣い人形芝居

1 奈佐原文楽 (栃木県)

尾島 利雄

奈佐原文楽は、栃木県鹿沼市奈佐原町の奈佐原文楽座(萩原長次座長)によって伝承されている三人遣いの人形芝居である。

現在この一座は、奈佐原町に住居をかまえている農商従事者やサラリーマン二十二名からなり、座付きの語り手(太夫)と糸(三味線)は他地区から迎えている。

この人形一座の歴史は、口碑伝承と人形頭の墨書や舞台幕などによって、わずかに伺い知ることができ

のみであるが、一応、江戸中期にこの地に伝播し、文化文政期には隆盛を極めたといわれる。その後、時代を経るに従って衰微したものを、明治二十九・四十年の二回にわたって当地を訪れた大阪文楽の人形遣い西

川小伊三郎(吉田国造)によって再興され、現在はその孫弟子の手での文楽が上演されている。

昭和二十八年には、土の香高い民俗芸能として栃木県の無形文化財に指定され、同四十六年には国の無形文化財に選択されている。

現在までの上演演目は「三番叟」

「寺小屋」「酒屋」「太十」「朝顔日記」「玉藻前」「安達三」「三代記」「阿波の鳴門」「弁慶上使」「弥次喜多」などで、なかんづく「太十」「阿波の鳴門」「安達三」などの出しものはこの一座のお家芸となっている。

近年、押し寄せてくる都市化、生活の近代化の波のあおりをくってこの文楽人形も一時上演不能の状態となったが、昭和四十五年度より、鹿沼市の後継者育成資金を含む物心両面にわたる援助と地元伝統の火を絶やすなという声が導火線となり、



奈佐原文楽

これに県の指導、文化庁の国無形文化財選択などが、強力なテコイレとなり、奈佐原町あげての奈佐原文楽保存会(石川芳松会長)が強化され、若手の後継者十四名の大量入座を見、完全に復活した。昭和四十六年九月二十二日には、竹の香もなつかしい本舞台を十数年ぶりに組み、記録作成の記念公演を地元奈佐原町で行ない、大好評をほくし、この四十七年二月十八日には鹿沼市老人ホームで自主公演を実施した。

(栃木県教委文化課 指導主事)

この点が「土の香りのする世界的古典芸術」だとして、ソ連での上演で絶讃を浴びた。

また、東京の国立劇場上演を機に国の無形文化財の選択を受け、今秋はニューヨークのアジア芸術協会の招待に応じられるよう地元ではその組織づくりに励んでいる。

三、後継者の問題

古典芸術につきものの衰退は、淡路人形浄瑠璃にも等しく及び、淡路人形協会(森勝会長)を中心に地元三原郡では地域住民を挙げて後継者の養成に努力している。

県立三原高等学校のサークル活動「郷土部」、南淡町役場職員「人形部」等……演技の錬磨に励んでいる。

昨年から子ども会活動の一環として南淡町賀集福井子ども会、三原町市小学校子ども人形グループなど、チビッコ太夫の誕生により人形づかいの老令化が悩みの種となっている淡路人形の保存に、明るい話題の一つとなっている。

(南淡町企画室広報係長)

2 淡路人形浄瑠璃 (兵庫県)

林 省吾

一、その由来
淡路人形のおこりは天正、慶長の間(西暦一六〇〇年頃)摂津西宮の百太夫というデコ廻しが、淡路に渡り、市三条村(いまの三原町市三条)において、デコ廻しの芸を披露したことから始まる。

百太夫は、その後三条村を水住の地と定め、デコ芝居の普及に努めたことにより淡路人形浄瑠璃が繁栄し、最盛期には四十八座を数えていたといわれている。

二、特徴

大阪文楽の元祖といわれる淡路人形浄瑠璃は、文楽人形より形体がはるかに大きく重い。この人形を頭つかい、左手つかい、足つかいの三人の役者が浄瑠璃と三味線に合わせて生きた人形のごとく使う。まさに三者の呼吸が合わなければ、土の香り豊かな人形の喜怒哀楽はかもし出せない。

現在、淡路には淡路人形座、市村



淡路人形浄瑠璃

六之唄、淡路源之唄の三座があり、その人形つかいはほとんど半農半芸で農閑期に地元で興行をしたり、地方巡業に出ている。

人形は文楽に比べて素朴で原始的であり、その頭は三、四割から倍近くも大きい。

それは役者(人形つかい)が自己の演技をよりよく見せるために工夫したもので、一谷ふたば軍記の熊谷次郎直実など武者人形は、十キロ余りある。

文楽の人形の操り方が技巧的でせん細なのに比べ、淡路人形は喜怒哀楽の表情表現が大きく、しかも素朴で力強く野趣に富んでいる。庶民の娯楽という雰囲気を感じ成している点で文楽よりはるかに優れている。

名称	座員数	カシラ数
下中座	一五	六二
長谷座	一一	四七
林座	一三	五一
前鳥座	一二	五〇
足柄人形芝居	一五	六二

(参考「神奈川県民俗芸能誌」)

訂正

会報第6号の次の二ヶ所に誤りがありましたので、お詫びして訂正します。

○表紙の号数第5号を第6号に訂正。

○アルバムの説明の内、浦賀の鹿蹄を虎蹄に訂正。

成の備みは深い。しかし、別掲のとおり厚木東高校の動きや、国に選択されたことによる保存会の張り切りぶりを見ると、悲観的ばかりとはいえないであろう。

各座の現況は次のとおり。

名称	座員数	カシラ数
下中座	一五	六二
長谷座	一一	四七
林座	一三	五一
前鳥座	一二	五〇
足柄人形芝居	一五	六二

(参考「神奈川県民俗芸能誌」)

訂正

会報第6号の次の二ヶ所に誤りがありましたので、お詫びして訂正します。

○表紙の号数第5号を第6号に訂正。

○アルバムの説明の内、浦賀の鹿蹄を虎蹄に訂正。

ニュース・伝言板

▽：第9回県民俗芸能大会は、平塚市教育委員会の協力を得て、7月9日(日)平塚市民センターで開催される。出演は「子供たちの民俗芸能」の予定。

▽：県立厚木東高校では、46年5月頃から三人遣い人形芝居の練習を始め、すでに学校の文化祭などで上演した。演目は「絵本太功記・尼ヶ崎の段」。

▽：県立高浜高校(平塚市)の児童文化部では、47年1月から「乙女文楽」を習い始めた。なお、「乙女文楽」は県立茅ヶ崎高校にも保存されている。

▽：「足柄ささら踊保存会」(南足柄市)では、小学生の女子を対象に後継者の育成につとめていたが、丸々踊・扇踊などその成果が実った。

▽：横浜市内に現存する唯一の一人立ち三頭獅子舞「驚神社の獅子舞」(港北区元石川町)の保存会が4月に結成される。

▽：6月10・11日の両日、国立劇場での民俗芸能の公演に、本県から

「乙女文楽」が出演する。他に八王子の「単人形」、佐渡の「文弥とのるま人形」等が演じられる。

▽：46年度会費未納の方は、次のいづれかの方法により納入して下さい。

(1) 事務局に直接郵送。

(2) 郵便局の振替を利用(各郵便局にある振替用紙に口座番号「横浜一三四二八、協会名を記入。料金は五百円まで二十円、千円まで三十五円)。

(3) 横浜銀行の振込を利用(各支店にある当座口振込依頼書に横浜銀行県庁支店・普通預金・口座番号七九七一一〇八・受取人「神奈川県民俗芸能保存協会々長 李家孝等を記入料金は無料)。

▽協会日誌△

47年2月10日 横浜・県立音楽堂で日本民俗音楽と舞踊の鑑賞会を開催。

2月16日 理事会を横浜市中区で開催。47年度事業計画等について審議。

2月26日 国無形文化財選択記念「相模人形芝居大会」を藤沢市民会館小ホールで開催。出演団体5。観客約四百名。

編集後記

「相模人形芝居大会」は、下中・長谷・林の三座が国の無形文化財に選択されましたのを記念して去る2月26日、藤沢市民会館小ホールで開催されました。当日は湘南地方では珍しく朝から雪模様で、出演者の意気込みに水をさすような天候でしたが、開会する時には四百三十の客席がほとんど埋まるような盛況で、主催者側も胸をなでおろした一日でした。

県内には現在5座の人形芝居が保存され、活動中ですが、これは県単位では全国一の数であります。なぜ本県にはかくも多くの人形芝居が現存するのかとよく聞かれますが、この質問に対して考えられることは、まず第一に実際に保存されている方々の努力の賜ものであり、長い間保持されたその熱意と誇りの結晶といえましよう。また、地元民の協力と県及び市町村のそれなりの支援もあったことでしょう。そして、当日驚かされたことありますが、人形芝居に対する観客の理解です。大夫ととも

に義大夫を客席で語っている人がなんと大勢いましたことか。見せ場になると大きな拍手が起るのも当然といえましよう。この観客の熱気が出演者に伝わる。出演者がそれに答えべく熱演するという両者の一体感は見せることを柱とする人形芝居には特に必要であり、それが人形芝居保存のエネルギとなるのであろうと強く感じました。

また、忘れてならないのは水田衛吉先生の民俗芸能に対する深い愛情と繊細な配慮であります。それは、県文化財専門委員や協会副会長などの立場を越えて、人形芝居に限らずかながわの民俗芸能全般の保存と発展に大きな力となっていることは言うまでもありません。(小野記)

「かながわの民俗芸能」

第七号(相模人形芝居特集号)

昭和47年3月25日発行

横浜市中区日本大通り一

神奈川県教育庁文化財保護課内

編集 神奈川県民俗芸能保存協会

発行 事務局長 Tel 041-222-1111

印刷 株式会社 中島印刷所

Tel 041-064-106

